館長の手記

一昨年の２月の分から記述がある。多くは日常業務の覚え書きだが、市職員とうまくいっておらず、考古館の運営に苦慮している、といった内容の記述が多い。

しかし、苦心しながらも誠実な考古館運営を行おうとしていたことは読み取れる。

今年の8月頃から気になる記述が出て来る。以下がその抜粋。

8月10日

一般の方から寄贈の申請がきた。私が館長になってから寄贈がくるのは初めてだ。青森にお住まいの方がわざわざこの考古館に寄贈を申し出てくれるとは。貴重な資料に万一のことが無いよう、万全を期して受け入れなければ。

8月26日

寄贈資料の受け入れが完了した。これほどの量が一家庭に眠っていたとは信じがたい。明日から研究調査を進めるのが楽しみだ。

8月29日

寄贈資料に目を通してみたが、どれも江戸時代以降に書かれた書物や出土品のレプリカが大半だった。歴史的価値はありそうもない。資料の内容も偏った内容ばかりで、展示に出すのは難しい。しかし、まだ一部しか調査できていないが資料の端々から漂う狂気的なまでの怒りや恨み、あれはあれで人の信仰を形作るための重要な要素なのかもしれない。

9月5日

何かに見られているような気がする。そして夢に出て来るあの光景は何なのか。紫色の空間に無限に続く輪。あれが何を意味するのか。私は正常なのか？

10月1日(今までの整った筆跡と違い、文字が崩れている。)

なにがオオクニヌシだ。侵略者どもがあのお方を閉じ込めている。許せぬ。耐えられぬ。この国は欺瞞に満ちている。私が目を覚まさせてやらねば。どいつもこいつも騙されていることに気付いてもいない。今に私が真の神を、本当の日本を取り戻して見せる。それが出来るのは私しかいないのだ。

11月2日

偽の神を崇める下らぬ偽書を焼き払ってやった。何が国譲り、何が日の神か。妄言を垂れ流す悪書。この世から全て消してやらねばならぬ。

我らが真の神を記す書物をこそ保存せねばならぬ。収蔵庫も自身の真の役割を果たすことができているからか、知識を湛えるその姿がより整然として見える。

あの収蔵庫は私の持つ鍵でしか入れない。今はまだ世に出すこともない。真の神が姿を現してからこそ、あの書物は聖書となり人々を導くのだ。

11月5日

工事が終わった。完璧だ。

カードキーのために金庫も用意した。決して邪魔されるわけにはいかない。

しかしパスワードは流石に安直すぎた気もする。とはいえ、この部屋に入れる者がそもそも私以外いるわけでもなし。万が一にもパスワードを忘れることのない数字でいいだろう。この数字は後の世で特別な意味を持つことにもなる。後は準備を急がなければ。

11月10日

儀式の準備は整った。私はやはり凡人ではあったが、最低限の魔力を込めることはできた。決行は明日。

奇しくも明日はニナの誕生日。やはりニナは選ばれし者なのだ。生まれた時から真の神の祝福を受け、この日のために生まれてきた子だったのだ。ニナは真の神が統治する世界で女神として語り継がれ、存在を昇華していく。私はそのために我が身を捧げよう。

ニナ、私の最愛の娘。